

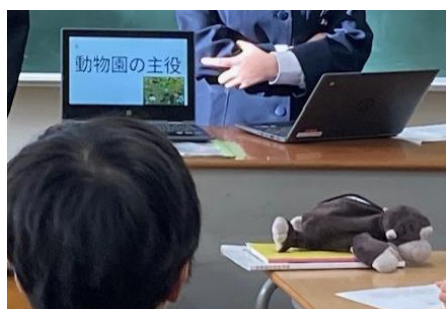
海を越えて

先月「2027年度をもって大鰐線を休止する意向」と青森県の弘南鉄道がプレス発表しました。沿線には弘前高校や弘前大学をはじめ複数の学校が存在する文教都市を支えてきた鉄道です。鉄道が無くなるということは、土地と土地、いいえ、人と人を結んでいた絆が途絶えたように思えて。それは文化の衰退を意味するようで悲しい気持ちになります。廃線とは対照的に、津軽海峡の海底から100m下のところで青函トンネルが海を越え青森と北海道を陸続きにし、8年前には新幹線が開通しました。青函フェリーで3時間50分。新幹線なら新青森—新函館北斗間を1時間、圧倒的な時間の短縮です。便利になり、経済効果をもたらすはずなのに、青森県民の意識としては、「道南・函館に青森県の観光客が吸い取られる」「北海道から青森県に訪れる観光客が日帰り化する」などと、良いイメージをもっていないようです。失われる路線があれば、新設される路線もあります。新設線の沿線各地で素敵な土地と土地の関係が結ばれることを祈ります。



本校の生徒会は海を越え、太平洋に浮かぶ八丈島とwebという線で結ばれました。八丈島は東京から290km、羽田空港からジェット機ならば1時間程度。八丈町立大賀郷中学校の生徒会と交流を行いました。大賀郷中との情報交換から開始。大賀郷中は、各学年1クラスずつしか無いこと、全校で51名しか居ないこと、他にも…。清瀬中との違いに清瀬中本部役員は驚くことばかり。小さい規模だからできること、小さい規模だからできないことがあることが分かりました。海を越えた場所にドラマを感じていました。続いて清瀬中の情報紹介と生徒会企画「構成的グループエンカウンター」について紹介しました。

エンカウンターとは、ホンネを表現し合い、それを互いに認め合う体験のことです。構成的グループエンカウンターとは、リーダーの指示した課題をグループで行い、そのときの気持ちを率直に語り合うことを通して、仲間との距離を近づけます。12月11日に全校で朝学活の時間帯に生徒会企画のグループエンカウンターを行いました。その名も“かぶんなきゃーよ”学級委員からのルール説明でスタート。“動物園の主演”などとお題が出されると、各自が回答を紙に記入。「せーの!」の掛け声で見せ合いました。グループ内で同じ答えがいくつあったか、被った数だけポイントが入ります。グループ内で会話が弾み、それぞれの回答に一喜一憂し、その姿は周りにいる教員たちを暖かくさせました。ドラマを見ているようでした。人と人を結んだ絆が芽生えたように思えて。



1977年に発売された『津軽海峡・冬景色』はかつての青函連絡船を舞台に、津軽海峡を越えて北海道に渡る人々をえがいた叙情詩。別れをテーマにしたこの 演歌うた う石川さゆりさんは、当時19歳。まるで自らの経験のように詞の世界に入り込み涙目で唄いあげていました。失恋など知らない小学生でありながら私は、彼女の創り出すドラマに引き込まれた記憶があります。当時、新幹線が開通していたとしたら、「海鳴りだけを聞いている」「凍えそうなかもめ見つめ泣いている」ことは無かったのでしょうか。速さや効率を求める時代となっていますが、連絡船のようにゆっくりと流れる時間に言葉が生まれ、ドラマが創造されていきます。今回のエンカウンターは人と人を結ぶきっかけに過ぎません。ゆっくりと時間をかけ、仲間とドラマを創造してください。皆が引き込まれる物語を。

1月に八丈島を訪問予定です。大型船橋丸で10時間かけて太平洋を南下することにしました。